

# 課題解決のために必要な情報を集め、わかりやすい伝え方を工夫しながら、積極的に情報発信をしていける子どもの育成

～「ふるさと探検－私たちの木島平－」自然・営み・伝統に関わる実践から～

長野県下高井郡木島平村立北部小学校 宮 下 宏

## 1. はじめに

自然環境に恵まれた中に位置する北部小学校は、全校児童数103名、1学年1クラスの小規模校である。本校では「豊かな心を持ち、たくましく生きる子ども」を学校目標とし、各教科等の学習指導において「自ら課題を見出し、見通しをもって生き生きと追究する子ども」の育成を全校研究テーマとして設定し、児童が主体的な学習を展開していけるよう授業改善に努めてきている。

本校の特性として、子どもたちは保育園時代からほとんど変わらない人間関係を保ち、信頼し合い安心して学び生活できる居場所となっていることがあげられる。一方で、話し合いの場で意見を交換し合って考えを深めたり、大勢の前で自分の思いを伝えたりすることには躊躇する姿が見られる。平成15年度には下高井・飯水教育課程研究協議会が本校で開催され、その中心的研究課題として、国語科の領域である「話すこと・聞くこと」におき、自己表現力の高まりを目指してきた。

今年度は、長野県新聞活用教育（NIE）の適用を受けたことを機会に、学習の中間報告やまとめとして一人一人の新聞作りをおこなうことにした。課題解決のために情報収集をおこない、集めた情報を整理したり、わかりやすくまとめたりすることで、自らの課題について思考を深め、「話すこと・聞くこと」の発展的自己表現として情報発信できる子どもの育成を願い、新聞記事の活用を図ったものである。

## 2. 新聞活用の環境設定

### (1) 新聞コーナーの設置

- ・校長室に5社の新聞を並べ、児童や教師が自由に閲覧できるようにした。

### (2) 新聞の保管と記事の利用

- ・新聞のバックナンバーは、各社ごと日付順にして保管した。
- ・毎日2部届く地元新聞は1部を切抜き可とし、カラー写真などの活用を図った。1部のみの他社の新聞は、必要な記事をコピーして使い、後からも利用できるようバックナンバーの整理に努めた。

### (3) 新聞記事の紹介

- ・理科や社会科の学習に役立ちそうな記事やスポーツなどの記事は、子どもたちや教師に紹介し、新聞に対する関心意欲を高めるよう配慮した。

### (4) 児童会活動で取り組む新聞作り

- ・児童会の委員会の一つに「新聞ふるさと委員会」があり、学校行事の紹介や身近な話題を記事にして掲示新聞の作成をおこなった。

### 3. 実践の概要

具体的な新聞の活用は、5年理科の「天気の変化」6年理科の「大地のつくり」、また3月に開催されたスペシャルオリンピクス関連の記事などがあげられるが、ここでは、4年のふるさと学習（総合的な学習の時間）で取り組んだ「ふるさと探検－わたしたちの木島平－」の実践例を紹介したい。

#### (1) 国語科単元「新聞記者になろう」の学習

国語の教科書には、新聞の特徴を調べ、目的に適った取材をしたり、紙面の割付をしたりして、新聞の作り方や新聞の果たす役割について学ぶ「新聞記者になろう」という学習単元がある。4学年では、NIEへの取り組みと関連させて、実際の新聞紙面の割付や構成について調べ、ふるさと学習を通してわかったことや学んだこと、また社会科でおこなった長野見学などの学習のまとめを一人一人がA4サイズの新聞として発行することにした。



紙面構成や記事を丹念に見る（H16.10.14）

#### (2) 4学年ふるさと学習「樽川洪水と消防団」の実践

子どもたちは1年生のときから「干し柿作りに挑戦」「こうぞ栽培と和紙作り」「柿渋と和紙によるうちわ作り」「ハクビシンがやってきた」「木島平村内めぐり」など、特色ある地域の自然や伝統的産物、暮らしに目を向けた学習に取り組んできた。これらの活動の中で「柿」は学習教材として中心的位置付けをおこなってきた。現在は農産物として省みられることが少なくなったとはいえ、柿は木島平のいたるところに散在し、里山風景の象徴ともなっている。この柿を軸にして深まりや広がりを求め、子どもたちの住む木島平を多角的にとらえ、ふるさととのよさを学びとらせたいと願ったものである。

平成16年度は、引き続き柿を素材とした教材化を図るとともに、柿を中心にすえながら木島平村全体へ目を向けた活動に広がってきている学習経過をもとに、新たな単元設定を試みることにした。さらにふるさと学習全体計画のねらいに照らし合わせ、北部小学校として特色ある地域素材の掘り起こしや教材化の一助となることを願い、総括単元名を「ふるさと探検－わたしたちの木島平－」と題し、「自然」「営み」「伝統」の各分野に分けて実践していきたいと考えた。

上記単元は、昭和57年9月13日に見舞われた台風18号による樽川の大洪水の災害を掘り起こしたものである。子どもたちは、ふるさと探検の「自然」編で樽川河川を歩き、そこに「最高湛水位標示柱」を見つけたことから、かつて大災害があったことを知る。そのときの被害の状況を個々の課題に基づいて調べていく中で、消防団として私たちの暮らしを守ってくれている人々の存在に気付かせ、苦勞をしながらも使命を果たすことの大切さやその人たちの生き方に学ばせたいと考えたものである。その学習過程で積極的に新聞記事を活用して、当時の状況把握やデータの収集をおこない、また、わかったことを各自の新聞という形でまとめ、情報発信していくことにした。

① 単元展開

学 習 活 動	教師の指導と手だて (場の設定・教材の提示・方法等)
<p>1. 樽川洪水ってなんだろう。 ○樽川沿いにある「最高湛水位標示柱」から、昭和57年9月13日に起きた樽川洪水に関心をもつ。</p> <p>(1) 樽川の洪水は台風によるものであることに気づき、各地に災害をもたらしている最近の台風に関する新聞記事を収集する計画を立て、台風情報のスクラップを作る。</p> <p>(2) KA児の母親が小学校2年のときに書いた「水がい」の作文を読み、大変な洪水があったことを知る。</p> <p>(3) 家の人に聞いたことを発表し合い、洪水について共通理解を深める。</p>	<p>1. 「ふるさと探検」で見つけた「最高湛水位標示柱」から、樽川の氾濫があったことに気づかせ、樽川洪水について調べようという意欲をもたせる。</p> <p>(1) 台風と災害の因果関係に気づかせ、NIE提供の新聞から台風に関する記事を継続的に収集することを通して、災害の怖さや人々の苦労を共感的に受け止めさせる。</p> <p>(2) 水害当時、木島小学校に在籍していたKA児の母親や伯父が書いた作文を紹介し、身近な人の心痛に心を寄せ活動意欲を高めさせる。</p> <p>(3) 各自の集めた情報を交換し合い、樽川の洪水の概要をつかませる。</p>
<p>2. 樽川洪水について詳しく調べてみよう。 ○樽川洪水についてもっと調べてみたいと思うことを調査テーマとして決め、個人または小グループで調査活動をおこなう。</p> <p>(1) 洪水が起きた年月日や洪水の範囲、被害の様子、水害にあった人々の苦労など、調査するテーマを決める。</p> <p>(2) 家族や親戚の人などに、当時の水害の様子を聞く。</p> <p>(3) 水害の記録や当時の新聞記事、木島平村側で災害にあった方の聞き取り調査などから、事実の掘り起こしをおこなう。</p>	<p>2. 木島平村や隣接の飯山市下木島に大洪水があったことについて、一人一人調査テーマを設定し、目的に合った調査方法で調べ、樽川洪水についての理解を深める。</p> <p>(1) 洪水に関する疑問や調べたいことについて、個々に相談にのり、テーマの絞り込みと具体的に調べる内容の決め出しをさせる。</p> <p>(2) 家族や親戚など、樽川洪水の様子を知っている人への聞き取り調査をおこなわせる。</p> <p>(3) 具体的な被害の調査に関しては、当時の新聞記事や千曲川河川事務所から提供を受けた航空写真、学校や飯山市の図書館にある災害の記録の本、個人で記録を記した資料や写真などを準備しておく。</p>
<p>3. 消防団の仕事や活動について調べてみよう。 ○水害にあった人々を助けた消防団の存在に気づき、消防団の活躍について調べる。</p> <p>(1) 消防団員になる人や大まかな組織、仕事の内容、樽川洪水のときの活動の様子など、自分が調べてみたいことを決める。</p> <p>(2) 10月に襲来した台風によって樽川・千曲川が増水した際、消防団が活動しているVTRを視聴したり、昭和57年当時に活躍した消防団長の話を聞いたりしながら、消防団の役割や活動の実際について理解する。</p>	<p>3. 水害にあった人々を誰がどのように助けたのかという疑問から、消防団の活動に注意を向けさせ、消防団のことについて理解を深めさせる。</p> <p>(1) 消防団の組織や実際の活動についてなど、個別に相談しながら消防団について調べたいことを焦点化させる。</p> <p>(2) 平成16年10月21日の台風23号接近で河川が増水した時のVTRから、消防団の警戒態勢や洪水をくい止める活動の様子を見せる。また、昭和57年の樽川洪水の時に実際に救助活動を指揮された消防団長を招いて、その時の様子を話していただいたり、疑問等について答えていただいたりする。</p>
<p>4. 消防団の人の生き方に学ぼう。 ○消防団の人たちには、どんな苦労や嬉しいことがあるのかを知り、人命を救ったり災害から守るために自分の危険を顧みず活動したりする姿から、消防団員としての使命がわかり、これまでの調査をまとめる。</p> <p>(1) 私たちの暮らしや安全を守るために消防団員は、使命を果たそうと努めていることがわかる。</p> <p>(2) みんなに知らせるために「樽川洪水と消防団」について調べたことを新聞や調査記録集にまとめる。</p>	<p>4. 自分の仕事とは別に消防団として救助活動や捜索活動をしてくれる団員の大変なことや苦労、また嬉しいことについて話し合い、消防団員としての使命感や生き方に学ばせ、情報発信としてこれまでの学習をまとめさせる。</p> <p>(1) 大変なことや苦労があるにも関わらず、消防団として活動をしているのは、私たちの暮らしを守るという使命感があることに気づかせる。</p> <p>(2) これまでの学習によってわかったことや考えたことを新聞にまとめたり、パソコンによる調査記録を作成したりする。</p>

## ② 学習の経過

【H16.10.1】

毎年恒例となっているアウトドア体験教室を、今年も8月21・22日におこなった。今回は「ふるさと探検」として村内を流れる樽川に行くことにし、山ノ内町との村境、樽滝、浄化センターの排水路、馬曲川との合流地点、そして千曲川に流れ込んでいる様子を菜の花公園から展望した。

その途中、中町に立てられている最高湛水標示柱を目にした子どもたちに、これは川の水があふれたときに、ここまで水がきたことを示す標柱であることを伝えた。

授業では、この標柱からかつて木島平には大きな洪水があり、洪水は台風が原因となって起こるのではないかと気づいた子どもたちである。その台風と災害との関連については、ST児によって新聞で調べることができるのではないかと意見が出された。そこで長野県新聞活用教育（NIE）によって配信されていた5社の新聞から台風関連の情報を選択し「台風新聞」を作ることにした。



洪水のあとを示す最高洪水標示柱

T 夏にアウトドア体験教室をしたよね。覚えているかな。そのとき、どんなことを話したり、発見したりしましたか。

TR 樽川や馬曲川は、どこに流れているとか、合流しているかとかを調べた。

TS 山之内町と木島平村の境のところまで行って樽川を見たり、樽滝を見たりした。

TM 川巡りをしたときに、洪水の話をした。

KA 洪水のときに、ここまで水がきたという印を見つけた。

T よく覚えていたね。それは西町にあった最高水位を示す柱だったね。どうして、あんなところに柱が立てられていたんだろう。

KKe 雨が降って水がたまって、川があふれたんだよ。

KK 堤防が低いときに、堤防がこわれてしまって、下木島の方に水が流れていってしまったんだって。



木島周辺の被害の様子

- KA 川の水が増えたとき、下木島の方の堤防が切れて洪水になったという話をお母さんから聞いた。
- T どうしてこんな洪水がおきたのか、わかるかな。
- KK 大きな台風がきて、いっぱい雨が降ったんだっていったよ。
- TM テレビで川があふれたところや道がくずれたのを見たことあるよ。
- ST 新聞にも洪水や山くずれの写真が出ていた。
- T そうか。洪水は台風によって起こったらしいんだね。では、台風の災害のことは、どうやって調べたらいいのかな。
- ST 今までとってある新聞や毎日来る新聞で調べればいいよ。

【H16.10.5】

- T 今日はAさんのお母さんやおじさんの作文を紹介したいと思います。Aさんのお母さんは、木島小学校2年生のときに洪水にあったそうです。(作文を読む)
- T 今の作文を聞いて、どんなことを思ったかな。
- TM 大変だったと思った。洪水で一階と二階がほとんど沈んでしまったと聞いた。でも、木島にいた人たちは助かってよかった。
- KA 家具とかがだめになってしまっていて、あと片づけが大変だった。
- TS 洪水にあった人たちは、どうやって逃げたんだろう。
- KK いかだに乗って逃げた人やヘリコプターで助けられた人、肩車をしてもらって逃げた人とかいたって、おばあちゃんがいったよ。それから、トイレに水が入って困ったんだって。
- T 作文から洪水の大変な様子が伝わってきましたね。この作文を聞いて、みなさんの中には調べてみたいことや疑問がある人もいます。自分の調べてみたいことや、もっと知りたいことを書き出してみましよう。

【H16.10.8】

祖父母参観日では、祖父母の方に子どもたちがもった疑問や、樽川洪水についてさらに知



天気図から台風の動きを知る (H16.10.1)

りたいことなどをたずねる時間を設定した。FA児は振り返りカードの感想に「57年のことがもっとわかってきた。わたしのおばあちゃんにも聞いた。こう水のあとかたづけが大変だった。」と書いている。22年も前の話であっても、祖父母の方が体験した洪水の恐ろしさや大変さは、子どもたちの胸に深く浸透したようである。



洪水の様子を語ってくださる (H16.10.13)

【H16.10.13】

祖父母参観日で樽川洪水について話を聞く中で、その原因となったのは台風18号によるものであることを知った。子どもたちは、このところ台風による被害が頻繁に伝えられていることから、台風への関心も高く、新聞記事を切り抜いて作った「台風新聞」は、9月1日から10月にかけて継続して作ることを決めた。

【H16.10.21】

長野県に接近した台風23号の影響により、千曲川は増水し、各支流となる河川において逆流現象を引き起こした。学校近くを流れる樽川も増水によって遊水地となっていた田畑を水没させ、道路も冠水となって、消防



樽川の洪水を観察 (H16.10.21)



自分の目で見た樽川の様子 (H16.10.21)

団への出動および警戒態勢の発令となった。

昭和57年、58年の大洪水の再来かと緊張する中ではあったが、洪水の恐ろしさを肌で実感するにはよい機会と考え、北部小5年生が米作りをしている田んぼへ下りてみた。「うわー、何これ。」「田んぼがない。」「物置が沈んでいる。」口々に叫ぶ子どもたちは、樽川の増水による様変わり肝を冷やした。付近の様子をスケッチしたり、気づいたことをメモしたりしたあと、教室へ戻り「わたしたちの見たたる川こう水」としてまとめた。

#### 【H16.10.25】

台風23号は県内だけではなく、全国に被害をもたらした。子どもたちは、特集新聞として「台風23号によるひがい」を作成した。



#### 【H16.11. 2】

昭和57年の樽川洪水について個人の調査テーマと調べたいことについて決めた。さらに洪水による木島平側の被害について調査したいとの希望を受け、全員で聞き取り調査をおこなうことにした。



洪水についてインタビューする (H16.11.4)





# 学んで知った「故郷」

木島平村北部  
小学校4年生  
に学校科学大賞優秀賞

平成一七年三月一九日(土)  
信濃毎日新聞より

このほど行われた県内民間放送主催の「第三回学校科学大賞」優秀賞に、木島平村の北部小学校4年生(下学年)の研究「ふるさと探検」が選ばれた。

同小4年生は、一年生の時から故郷にまつわる学習と取り組み、「自然と営みと伝統」をテーマに、動物の飼育や村内商店などでの職場体験、柿を使った工芸品製作などを学習体験してきた。

「自然」編では、ハクビシンの飼育や、昭和五十七年の樽川水害

村民協力を得た哺乳動物の情報集めなどに取り組み、厳しいけれど、そのうち懐かかな生命の営みを抱く自然の価値を学んだ。村に伝わる「鬼の首伝説」の学習では鬼を自然の象徴ととらえ、人間が自然界に立ち入り過ぎ

た」という、反省も語られた。

また「営み」では、郵便局や特別養護老人ホーム「望居荘」、漬物工場、コンビニなどでの職場体験を行い、村の暮らしや産業、福祉の

実態などを、「伝統」では、村に豊かな柿を取り上げ、柿渋を作ったり、伝統的工芸品の内山和紙を活用した電気スタンドを製作した。

「学校科学大賞」は、こうした取り組みの、人文科学的価値が評価されたものとみられる。

担任の宮下宏先生の話では「実際に自然や柿らし、伝統にふれ体験することで子どもたちは村を知り、関心を抱くようになった。今後、地域に受け継がれる暮らしの知恵を知り、学ぶことができれば」と思っていますと語る。

## 4. 成果と反省

- (1) 長野県新聞活用教育の実践を通して文字情報の活用のあり方と文字文化の重要性について改めて考えさせられた。ビジュアル的およびバーチャル的情報が溢れる昨今、それらの直接的あるいは即時的なメリットの大きさはいうまでもない。一方、文字で伝えられる情報は、整然とした時間軸の中で要旨が整理され、伝える側の立場や意図を明確に読みとれるよさがある。双方にそれぞれの情報媒体としての優れた点が認められるが、4年生としての情報の収集、整理、発信という過程や段階に配慮し、子どもの思考を深め、表現力を高めさせる手立てとして新聞の活用を試みることにした。今回、新聞作りの手順に倣って情報収集をおこなったり、情報源として新聞活用を図ったりしたことは、必要な情報の集め方を理解し、文字を通して伝えたいことを端的にまとめ、しかも読み手を意識して「わかりやすく」「見やすく」を念頭において構成するという表現活動の上で大切なことを学び得る機会となった。

- (2) 様々なテーマに基づいた調べ学習や社会見学実施後のまとめ等、事実の記録やデータ整理などとともに、新聞発

行者の感想や考えなどを加えることで、一人の学びを大勢の児童に伝え、共有することができた。上の記事にある受賞に至った経緯には、この学習形態の積み重ねによるところが大きい。

- (3) 新聞記事の教材化や学習理解の手がかりとして活用を図っていくためには、情報の分類や必要となる情報の整理が重要となってくる。しかし、膨大な情報量の中で日々取捨選択をしていくことは、現状として困難が伴う。そこで、タイムリーな情報はその時々判断となるものの、各教科における年間指導計画の中で、新聞による情報の積極的な取り込みを計画しておくことは可能であると考えられる。年間を見通して学習内容との関連をもたせ、重点的におこなう新聞記事の活用のあり方をさらに検討していきたい。